

あなたは聖書の預言が

理解出来ますか？

何百万もの人達が、私達は現在すさまじく恐ろしい時代に住んでいる事を知っています。彼らは核戦争となる第3次世界大戦時の、いろんな「終末」のシナリオを描写した聖書の預言に関する本を読んでいます。地球の最後を予告するその様な書物の多くがベストセラーになりました。軍事戦略家や政治家達は、想像もつかない様な核戦争を「アルマゲドン」という聖書の言葉を用いて表現してきました。あなたは聖書の預言が理解出来ますか。それは「封印」されたものなののでしょうか。それを理解出来るのは極わずかな人だけなののでしょうか？預言とは一体何なのでしょう？ある特定の預言を、ある人は一つの形で解釈し、またある人は同じ預言を別の形で解釈する時、何を信じればよいか分かりますか？このシンプルではあるが深い内容を秘めた小冊子で、どうすれば「聖書の預言が理解出来るか」読み取って下さい。

ガーナー・テッド・アームストロング 著

聖書の預言の数々よりも興味深く神秘的に満ちたものがあるのでしょうか？いろんな金属とぬかるんだ粘土で形作られた偉大な肖像が出てくるダニエル書、3匹の獣を絶滅させる為に登場するたくさんの角や「小さな角」をもった獣達、不思議な封印やトランペットの災難が登場する黙示録、大きなドラゴン、太陽の衣を着た女性、象徴的な奈落の淵と言った様に、確かに聖書の預言には興味深く謎めいた不可思議な事がたくさんあります。

せいしよぜんたい ぶん よげん だいよげんしや
聖書全体のおよそ3分の1は預言なのです！大預言者にはイザヤ、エレミア、エゼキエルが
ふく しょうよげんしや かれ よげん ひかくてききかん みじか よ
含まれ、小預言者（彼らの予言は比較的期間が短いのでそう呼ばれています）にはホセアか
らマラキまでが含まれています。

ひと き すべ よげんしや なか もっと くだい
ほとんどの人は気づいていないのですが、イエス・キリストは全ての預言者の中で最も偉大
な預言者であり、彼の「オリベットの予言」（マタイによる福音書24章、マルコによる
福音書13節、ルカによる福音書21節）は全ての予言を理解する上で重要な鍵となっ
ています。

おも そうせいき もくしろく あいだ よげん み
まさかと思うかもしれませんが、創世記から黙示録の間にも預言が見つかります。
しへん ほんらいよげんてき わくせい ひと せい まこと もくてき
詩篇のいくつかは本来予言的なものです。この惑星における人の生の真の目的や、
じぶん よう りゆう りかい こと よげん りかい こと ほんとう
自分がこの世に生まれてきた理由を理解する事は、予言を理解する事なくしては本当
に不可能な事なのです！聖書の予言とは誰にでも理解出来るものなののでしょうか？

しよ さいご だいてんし おうこく きた おお ぐんじこく
ダニエル書の最後で、大天使ガブリエルはダニエルにパレスチナ王国は北の大きな軍事国に
よって占領されるだろう、と聖書の中で最も長い預言を最後に詳しく説き明かしています。
せいしよ なか もっと なが もっと しょうさい よげん しよ しょう つづ しょう さいご
聖書の中でも最も長く最も詳細な預言であるダニエル書11章に続く12章と最後の
しょう とき だいてんしちよう た かれ まえ たみ こ
章でガブリエルは言いました、「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを
しゅご くだん おとず くに はじ いらい くだん
守護する。そして、苦難が訪れるだろう。国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難が。
とき しょ な する まえ たみすべ すく ち ちり
しかしその時、あの書に名が記されているお前の民全ては救われるだろう。そして、地の塵
なか ねむ おお もの めざ もの えいえん いのち もの えいきゆう つづ はじ
の中に眠る多くの者が目覚める。ある者は永遠の生命に、またある者は永久に続く恥と
ひなん まと しょう しょう せつ ゆうめい よげん
非難的となる。」（ダニエル書12章1、2節）イエスの有名な「オリベットの予言」で、
つぎ ごと い とき せかい はじ いま こんご けつ
イエスは次の如く言われました。「その時、世界の初めから今にかけて、そして、今後も決
お ほど おお くだん く かみ きかん ちち くだ
して起こりえない程の大きな苦難が来るからである。神がその期間を縮めて下さらなければ、
ひとりすく かみ えら ひとたち ため きかん ちち くだ
だれ一人救われない。しかし、神は選ばれた人達の為に、その期間を縮めて下さるのであ
う。」（マタイによる福音書24章21、22節）明らかに、イエス・キリストの予言と
だいてんし の よげん おな じ き こと かた
大天使ガブリエルがダニエルに述べたこの予言は、同じ時期の事を語っています。

つぎ ごと の わざわ ひ おお ひ よう ひ ほか
エレミアは次の如く述べています。「災いだ、その日は大いなる日、この様な日は他にない。
くる とき すぐ だ いみ かれ た
ヤコブの苦しみの時だ しかしヤコブはここから救い出される。[その意味は、彼はそれを耐

え忍ぶという事で、それから救われるという事ではありません。]その日はこうなる、と万軍の主は言われる。お前の首の枷を砕き、戒めを解く。再び敵がヤコブを奴隷にする事はない。彼らは永劫の神と、私が立てる王ダビデに仕える様になるだろう。」(エレミア書30章7-9節)

これは聖書の予言の中でも有名な大いなる艱難です。ガブリエルがダニエルに、「その時あなたの民は救われます！」と言った事に注目して下さい。ダニエルは何万というユダヤの仲間と共にバビロンで囚われの身だった事を思い出して下さい！北の10支族からなるイスラエルの家は、アッシリア王シャルマネセルの軍によって何10年も前に捕らえられていました。

したがって、聖書の預言の大いなる艱難は、神の民イスラエルに降りかかった災厄の時期である事は明らかです。(ヤコブの名前がイスラエルに変わった事を思い出して下さい！)

確かに、何百万という人々は「大いなる艱難」という言葉をよく知っています。それは世界規模の大戦争における、他に類を見ないトラウマ、苦しみ、心痛、病気、地震や津波、戦争による破壊や人命の損失の時代を暗示するものと思われる一般的な表現です。

さて、実際起こった事に注目して下さい！

「ダニエルよ、終わりの時が来るまで、お前はこれらの事を秘め、この書を封じておきなさい。多くの者が動揺するであろう。そして知識は増す。」(ダニエル12章4節)

ダニエルの預言が封じられ、閉ざされた事に注目して下さい。しかしその期間はどれくらいだったのでしょうか？誰も決して理解できない様にその言葉は封じられたのでしょうか？そうではありません！その言葉は「終わりの時まで」隠され封じられたのです。

あなた方は「終わりの時」に生きているのです！後にダニエルは、「これら驚くべき事は、いつまで続くのでしょうか。」と尋ねています。(ダニエル書12章6節)

「すると、川の流れの上に立つ、かの麻の衣を着た人が、左右の手を天に差し伸べ、永遠に生けるお方にこう誓うのが聞こえた。『一時、二時、そして半時たって、聖なる民の力が

まったく打ち砕かれると、これらの事はすべて成就する。』これを聞いても私は理解出来なかった。『わが主よ、これらの事の結末はどうなるのでしょうか。』彼は答えた。『ダニエルよ、もう行きなさい。終わりの時までこれらの事は秘められ、封じられている！多くの者が清められ、純白とされ、精錬されよう。しかし、邪悪な者は悪行を行い、誰一人としてそれを悟らないが、賢明な者達はそれを悟るだろう。』」（ダニエル書12章6-10節）ですから、ダニエルの預言は理解される事となります。ただし、それは「終わりの時」まで理解されないのです。

終末論者や聖書の預言の研究者達は何世紀もの間ずっとダニエル書と黙示録は互に関係がある事を知っていました。聖書の預言はまるでおもちゃ屋さんで買うジグソーパズルの様です。完全な絵を仕上げるには、ダニエル書だけでなく多くの預言書と共にヨハネの黙示録も必要であり、中でも特にキリストのオリベットの預言は必須です！

このような理由で、ダニエル書とヨハネの黙示録両方に関して、長年神学者によって多くの本が出版されてきたのです。

黙示録についてヨハネが言った事に注目して下さい。「イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずの事を、神がその僕達に示す為キリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕のヨハネにお伝えになったものである」（ヨハネの黙示録1章、1節）黙示録は僕達に「示す」為に与えられたのであって、隠す為ではなかったのです。しかし、それは「神の僕達に」これから起こる事を示す為に与えられたのです。

それでは、アモス書3章7節を見てみましょう、「主なる神は、その僕の預言者達に秘密を明かさずには、何事もなされない。」この地上の神の本当の僕は、聖書の預言を悟るだろうと神は述べています。

神はこの様に言っています。「一人一人に現れる『霊』の働きは、全体の益の為となっています。ある人には『霊』によって知恵の言葉が与えられ、ある人には同じ『霊』によって知識の言葉が与えられ、ある人にはその同じ『霊』によって信仰が、そして、ある人にはこ

の同一の『靈』によって癒しの力が、さらに、ある人には奇跡を行う力が、またある人には預言する力が、・・・」(コリント信徒への手紙1、12章7-10節)

使徒パウロは「神は、教会の中に色々な人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、・・・」と打ち明けています。(コリント信徒への手紙1、12章28節)

したがって神の聖霊の力、すなわち聖書の預言を悟る力は、神の真の教会にあると予言されています。神は数少ない真の僕達に限定的に預言を悟る力を与えようと、はっきり述べています。他の僕達は土地の信徒の集まりで牧師を勤めたり(ペテロやヨハネがそうした様に、使徒行伝8章14節)、福音を説く為に遣わされるといった他の役割を果たす為に召されるかもしれないが、必ずしも預言を悟る力を持ち合わせているわけではありません。

したがって、全能なる神は意図的に聖書の預言を保守したのだということがわかります。これらの預言は様々な自称宗教指導者とかカルト集団の組織者達の珍しい「弄び物」として与えられたりはしません。それは古代バビロニアの占い師、天文学者、星読みやウィッチクラフトを取り扱う者達の為にあるものではありません。また、空論家、狂信者、自称予言者とか宗教指導者達の弄び物として与えられたものではありません!

預言を理解する力はまさに真の神の教会の「一部」であるだろうと聖書は教えています。

預言とは何でしょうか?

預言とは前もって書かれた歴史です!

預言とは、神が「ご存知であった」人間本来の気まぐれに応じて、時には必要とあれば神の介入と相まって、神の構想を果たす為の計画全体の概要です!

全能なる神はゲームに興じる事はありません。聖書にある神の預言は単に好奇心を掻き立てたり、知能を刺激したり、少数の者達が神の宣託を独占する為に「秘密」をその者達だけに明かしたりするものではありません。

じっさい かみ よげんしゃたち しょうにん けいこく かれ かみ たみ
実際、神の預言者達はよく「証人」と「警告」をもたらしました。彼らは神の民をとがめ、
こじんてき ぜんこくてき かれ おお つみ き ため つか すなわ かれ
個人的にまた全国的に彼らの大いなる罪を気づかせる為に遣わされたのです。即ち、彼ら
つみ けっか き く あらた もと
に罪の結果を気づかせ、悔い改めるよう求めたのです！

ちよめい ひと れい ちゅうもく くだ てん き ち みみ かたむ しゅ かた わたし
著名な一つの例に注目して下さい、「天よ聞け、地よ耳を傾けよ、主が語られた。私は
こ そだ おお かれ わたし そむ うし かいぬし し しゅじん か
子らを育てて大きくした。しかし、彼らは私に背いた。牛は飼主を知り、ロバは主人の飼
ぼおけ し し わたし たみ み わ つみぶか くに
い葉桶を知っている。しかし、イスラエルは知らず、私の民は見分けない。なんと罪深き国
とが おも たみ あく おこな もの しそん だらく こ しゅ す せい かた
だろう。咎の重い民、悪を行う者の子孫、墮落した子らは主を捨て、イスラエルの聖なる方
ちようはつ おこ せ む な ぜ まえたち う あたま や
を挑発し怒らせ背を向けた。何故お前達は、なおも打たれようとするのか。頭は病み、
しんぞう おとろ あたま あし うら まんぞく な きず あざ うみ なお
心臓は衰えているのに。頭から足の裏まで、満足なところは無い。傷や痣、そして膿は治
ほうたい なんこう て あ まえたち くに こうはい まちまち や はら
っておらず、包帯や軟膏で手当てもされていない。お前達の国は荒廃し、町々は焼き払われ、
たはた みの まえたち め まえ いこく たみ く つ いこく たみ くつがえ
田畑の実りは、お前達の目の前で異国の民が食い尽くし、異国の民に覆されて・・・もし、
ばんぐん しゅ わたしたち ため せいぞんしゃ のこ わたしたち よう
万軍の主が私達の為にわずかでも生存者を残されなかったなら、私達はソドムの様になり、
に しよ しよう せつ
ゴモラに似たものとなっていたであろう。（イザヤ書1章2-9節）

ぎゅうしゃ みち えさ しき いち せいかく し ぐどん うし かみ
ここでイザヤは、牛舎への道と餌のある仕切りの位置まで正確に知っている愚鈍な牛を、神
かんぜん み す つみぶか たいしやうてき か
を完全に見捨てた罪深いイスラエルと対照的に描いています。

からだ たと るいすい おこな あたま せいふ さんぎょうかい かいしゃ きょういくかい
それから、体に例えた類推が行われています。「頭」は政府、産業界、会社、教育界、
かがくなら ぐんぶ うえ た ひと あらわ かみ あたま や い
科学並びに軍部の上に立つ人を表し、神は、「その頭はことごとく病み」と言っています！

こころ くに りやうしん い し けつだんりよく あ きんにく からだ けん ろうどうりよく
おそらく心は国の良心、意思や決断力に当たるでしょう。筋肉と体の腱は労働力であ
しんけいけいとう じゅんかんきけい くらろ りくろ ゆそうけいとう あ
り、神経系統や循環器系は空路や陸路の輸送系統でありコミュニケーションに当たる、とい
ぐあい
った具合です。

あし あたま あ きず あざ うみ かみ おし
「足のうらから頭まで」在るのは「傷や痣、そして膿」ばかりだと神は教えています。

とき ひとびと かみ すこ せいぞんしゃ のこ かみ たみ おな
その時、人々は、もし神が少しの生存者を残さなかったなら、神の民はソドムやゴモラと同
よう かんぜん はいかい なげ よげん こく つみ
じ様に完全に破壊されていただろう、と嘆いたのです！イザヤの予言にはイスラエル国の罪
たい おお ちようぼつ ふく しよ しよう せつ ほか げんだい
に対する多くの懲罰が含まれています。イザヤ書3章12節の他に、現代のアメリカ、イ
ほくおう みにしゅしゅぎこつか さら みなみ
ギリス、北欧の民主主義国家、更にカナダ、南アフリカ、オーストラリアやニュージーラン

ドに関して、ここまで具体的で正確なものがあるでしょうか？

神は次の様に述べられています。「私の民は、未熟な者達に虐げられ、女に支配されている。私の民よ、お前達を導く者は、お前を迷わせ、その道を乱す。」

今日、イザヤ書のこの予言には特に痛感させられる所があります。預言者は、誰一人として志願したわけではありません。

エレミアは、生まれる前から特別に神に召し出されていたのであって（エレミア書1章5節）、他の全ての預言者同様、その務めに自ら志願したわけではありませんでした。

それどころか、「神の言葉」がエレミアに届いた時、彼はこう言いました。「お聞き下さい。私は語る言葉を知りません。私は若者に過ぎませんから。しかし、主は私に言われた。『若者に過ぎないなどと言ってはならない。あなたは私があなたを遣わす全ての土地に出向き、私の命じる事を全て語るのだから。』」（エレミア書1章7節）

さて、2章から始まる神の民イスラエルに対する非難の言葉に注目して下さい。エレミアはこう述べています。「私は、お前達を実り豊かな地に導き、果物や幸福を与えた。ところが、お前達は私の土地に入ると、そこを汚し、私が与えた土地を忌まわしいものに変えた・・・」彼は尋ねて言います、「一体、どこの国が神々を取り替えた事があろうか、しかも、神でないものと。ところが、我が民は己が栄光を利益にならぬものと取り替えた。ああ、天よ、驚け、この事を大いに惜しみ悲しまれよ、と主は言われる。」（エレミア書2章11-12節）エゼキエルでさえ、彼は捕囚の境遇から予言したにも関わらず（エゼキエル書1章1節）、神の民イスラエルに対する恐ろしい非難のお告げを受けました。

“見なさい。私はあなたの顔を彼らの顔の様に硬くし、あなたの額を彼らの額の様に硬くした。・・・”（エゼキエル書3章4-9節）

エゼキエルはまたイスラエルの家に対して特別な指示を与えられた。彼はこう言われました。「人の子よ、私はあなたをイスラエルの家の見張りとする。ですから、私の口の言葉を聞き、彼らに私からの警告を与えなさい。私が悪人に向かって『お前は必ず死ぬ』と言う時、もしあなたが、その悪人の命を救う為に警告せず、悪の道から離れる様に諭さないなら、

その悪人は自らの罪故に死ぬ。しかし、私は彼の死をあなたの手に寄るものとする。しかし、あなたが悪人に警告したのに、悪人が自分の邪心と悪の道から立ち帰らなかった場合には、彼は自らの罪故に死ぬが、あなたは自分の命を救う事となるのだ！（エゼキエル書3章17-19節）

この様に神は預言者達の肩に重い個人的な責任を課したのです！預言者達の個々の使命を果たす功績は直接彼ら自身の救済と結び付いてしていたのです！もし彼らが悪人達に警告する事に失敗して悪人が死んだ場合、神は予言者に責任を持たせました。

もし彼らが悪人への警告に成功した時は、たとえ彼らのメッセージが無下に断られたとしても、預言者は救われたのです。

誰一人進んで神の預言者になった者はいなかったのです！

イザヤは自分は「汚れた唇」の者（イザヤ書6章5節）と言ったが、神は幻を通してイザヤをセラフィムの一人に会わせた。その手には祭壇から火箸で取った炭火があった。そしてセラフィムはそれを私の唇に当て言われた。「見よ、これがあなたの唇に触れたので、あなたの不正は取り去られ、罪は赦された。私はまた主の御声も聞いた。『誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか。』その時[イザヤ]が言った。『私がここにおります。私を遣わして下さい』」（イザヤ6章5-8節）どちらの場合も、神の預言者達は伝言を伝えたいと思う様に導かれなければなりませんでした！

これに関して最も顕著な例は、明らかに預言者ヨナの場合で、神が彼に負わせようとしていた責任から逃れようとした時の事です。ヨナは遭難し、特別に用意された巨大な魚に呑み込まれて浜に吐き出されました。ヨナはこの試練の後、謙虚に自発的に行動しました。

アモスが今住んでいる国を出て、神の審判について何も言わないように命じられた時、彼は反抗者達に言った言葉に注目して下さい。

「アモスは答えてアマツヤに言った。私は預言者ではない。預言者の息子でもない。私は家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。主は家畜の群れを追っている私をつかまえて、

『行って我が民イスラエルに予言せよ』と言われた。されば、主の言葉を聞け。あなたは『イスラエルに刃向かった予言をしてはならない。イサクの家に敵対する事を言ってもならない。』それゆえ、主はこう言われる。お前の妻は町の中で遊女となり、息子、娘らは剣に倒れ、土地は測り縄で分けられ、お前は汚れた土地で死ぬ。イスラエルは必ず捕らえられて、その土地から連れ去られる。」(アモス書7章14-17節)

この様にして神は以前様々な仕事に就いていた何人かの人を特別に呼び寄せ、彼らに神の伝言を与え、その伝言を持って、手に負えない強情で反抗的な神を拒む人達の所へ行くように命じました。

彼らはずっと拒絶されました！反抗的なイスラエルは神の伝言と警告を、今日までそうし続けてきた様に跳ね除けました！

イエスはパリサイ人への神の激しい懲罰でこの点に触れています。彼は次の様に言われました。「だから、私は預言者、賢者、学者をあなた達に遣わすが、あなた達はその中の何人かを殺し、十字架に貼り付け、また何人かはシナゴグで鞭打ちにし、町から町へと追い回して迫害するだろう。こうして義人アベルや、あなた達が聖所と祭壇の間で殺したバラキアの子ゼカルヤの血に至るまで、全ての正しき者達の血があなたの手によって地に流される事となる。これらの事は全て、今の世代の者達に降りかかって来ると断言しよう。ああ、エルサレム、エルサレムよ。預言者達を殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集める様に、私はお前の子らを何度庇護しようとした事か。だが、お前達は応じようとしなかった。見よ、お前達の家は見捨てられて荒れ果てる。」(マタイによる福音書23章34-38節)

おそらく預言者全員の要約はエレミアからイスラエルまでの神の言葉の中に見いだす事が出来るでしょう、「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。お前達の焼いた捧げ物を生贄の肉に加えて食べるがよい。私はお前達の先祖をエジプトの地から導き出した時、焼いた捧げ物や生贄について語った事も命じた事もない。むしろ、私は次の事を彼らに命じた。『私の声聞き従え。そうすれば、私はあなた達の神となり、あなた達は私の民となる。私が命じる道にのみ歩むならば、あなた達は幸いを得る。』しかし、彼らは聞き

したが みみ かたむ かれ かたく わる こころ たくら したが あゆ しょうじん だらく
従わず、耳を傾けず、彼らの頑なで悪い心の企みに従って歩み、精進せず墮落して
いった。お前達の先祖がエジプトの地から出たその日から、今日に至るまで、私の僕であ
る預言者らを、常に繰り返しお前達に遣わした。それでも、私に聞き従わず、耳を傾けず、
それどころか、より頑固になり、先祖よりも悪い者となった。・・・それ故あなたは彼らに
言うがよい。『これは、永遠の神の声に聞き従わぬ国であり、更正しようともせず、その民の
口からは真実が切り取られ失われてしまったのだ!』」(エレミア書7章21-28節)

かみ つか いじんたち おお ぎせい せいしょ ぶんけん かれ ただい こうけん かれ
神が遣わされた偉人達の大きな犠牲と、聖書の文献における彼らの多大な貢献、そして、彼
らが現代の私達に示した模範の為、彼らは新約聖書の「神の教会」のまさに基盤の一部だ
とイエス・キリストは言われました。

つぎ く ちゅうもく くだ かた とお わたしたちりょうほう じん いほうじん
次の句に注目して下さい。「この方(キリスト)を通して、私達両方(ユダヤ人と異邦人)
が一つの霊を介して、御父に近づく事が出来るのです。従って、あなた方はもはや、
外国人でも寄留者でもなく、聖なる民に属する者、神の家族であり、使徒や預言者という
土台の上に成り立っているのです。その要はイエス・キリストご自身であり」(エフェソの
信徒への手紙2章18-20節)

よげん にげんてき
預言は二元的です。

せいしょ よげん おお にじゅう せいしょ ひと しゅちょう はんろん ひと
聖書の予言の多くは二重になっています。すなわち、聖書は、一つの主張とその反論、一
つの形体とその対照形、先に(大抵は即時に)成就される事と後日最後に成就される事
といった表明から成り立っているのです。

じっさい けいたい たいしょうけい げんじつ げんえい ことば ひゆ たと るいすい
実際、ある形体とその対照形、現実の「幻影」、言葉のあや、比喩、例えばなし、類推な
ど、私達の文学や日常の会話に多く使われている様に、聖書の至る所でふんだんに使用
されています。

にげんせい もっと けんちよ れい ふくいんしょ しょう
おそらく二元性の最も顕著な例の1つは、マタイによる福音書24章でイエス・キリスト
が預言したイスラエルの差し迫った崩壊でしょう。(マルコによる福音書13章とルカによ
る福音書21章も併せて参照して下さい。)

よげん ぼうとう つぎ よう い こと ちゅうもく くだ
預言の冒頭でイエスが次の様に言われた事に注目して下さい。

「はっきり^い言^{ひと}っておく。一つ^{いし}の石^{くず}もここで崩^{ほか}れずに他^{いし}の石^{うえ}の上^{のこ}に残^{こと}る事^{こと}はない。」(マタイに
よる福音書^{ふくいんしょ} 24章^{しょう} 2節^{せつ})

それから^{にせ}偽^{にせよげんしゃ}メシア^{よげん}や偽^{つづ}預言者^{せんそう}についてのオリベットの預言^{せんそう}が続^{うわさ}きます。戦争^{せんそう}や戦争^{せんそう}の噂^{うわさ}、
世界規模^{せかいきぼ}の衝突^{しょうとつ}、飢饉^{ききん}、疫病^{えきびょう}、地震^{じしん}の全て^{すべ}が「悲^{かな}しみ^{はじ}の始^{おお}まり^{かんなん}」「大^{かい}なる^{いし}艱難^{かんなん}の開始^{かいし}」
として書^かかれています。(マタイによる福音書^{ふくいんしょ} 24章^{しょう} 21節^{せつ})

艱難^{かんなん}の次^{つぎ}に天^{てん}の徴^{しるし}の記述^{きじゆつ}があり(マタイによる福音書^{ふくいんしょ} 24章^{しょう} 29節^{せつ}),それ^{つづ}に続^{つづ}いて「人^{ひと}
の子^この徴^{しるし}が天^{てん}に現^{あらわ}れ」(30節^{せつ}),「キリスト^{さいらい}の再^{せい}来^{らい}」(30,31節^{せつ})^のが述^{せつ}べられてい^のます。

その章^{しょう}はキリスト^{けいこく}の警告^しで締め括^{くく}っています、「その日^ひ、その時^{とき}は、誰^{だれ}も知^しらない。天使^{てんしたち}達^{たち}
も知^しらない。ただ、御父^{みちち}だけ^{ぞんじ}がご存知^{せつ}である。・・・」(36節^{せつ})^とい^つったものや、キリスト^{せつ}
の間^まもない帰還^{きかん}の際^{さい}、人々^{ひとびと}はその時世^{ときよ}時節^{じせつ}の意味^{いみ}に全^まく気付^{きつ}かず、気^きにもかけ^まず暮^くらして
いるだろ^{けいこく}うという警告^{せつ}(37-39節^{せつ})、そして、気^きを付^つけず^{ふい}に不意^{ふい}ふち^くを食^くう者^{もの}達^{たち}の例^{れい}
(48-51節^{せつ})^があり^ます。

この預言^{よげん}に事^じ実^{じつ}に基^{もと}いた単^{たん}純^{じゆん}な調^{ちゆう}査^さを行^{おこな}う事^{こと}で、その二^に元^{げん}的^{てき}な性^{せい}質^{しつ}が簡^{かん}単^{たん}に理^り解^{かい}出^で来^きます。

という^{よげん}のは、エルサレム^{やく}がこの預言^{ねんご}から約^{はかい}40年^{そうぞう}後^ごに破^は壊^{くわい}され^たから^{です}！ヨセフ^{そぞう}スは想^{そう}像^{ざう}
し^うる最^もも残^{ざん}忍^{にん}で恐^{おそ}ろしい虐^{ぎやく}殺^{さつ}を書^かき記^{しる}して^います。長^{なが}引^びく包^{ほう}囲^い、ひどい飢^き饉^{きん}と飢^うえ、
最^{さい}終^{しゆう}的^{てき}な町^{まち}の征^{せい}服^{ふく}、何^{なん}万^{まん}人^{にん}ものユダヤ^{じん}人^{くしぎ}が串^{ごう}刺^{もん}しに^うされ拷^し問^{いた}を^{さま}受^まけて死^とに至^ちる様^{よう}、町^{まち}を取^と
り巻^まく城^{じゆう}壁^{へき}上^{じゆうぶ}部^{いし}の石^はが剥^{くず}が^おされ崩^なれ落^{しん}ち、名^なのある神^{しん}殿^{でん}は汚^{けが}される、^とい^つったもの^{です}。

ナザレ^{よげん}のイエス・キリスト^{じだい}の預言^いどおり、その時^{ひと}代^{たち}に生^{よげん}きる人^{ひと}達^{たち}はオリベ^{よげん}ットで預^{よげん}言^ごされ^た
事^じ象^{じょう}が実^{じつ}現^{げん}する前^{まえ}には滅^{ほろ}び^ませ^んで^した。

しかし、「天^{てん}の徴^{しるし}」は見^みられ^ませ^んで^した！「人^{ひと}の子^この出^{しゅつ}現^{げん}の徴^{しるし}」は天^{てん}に現^{あらわ}れな^かったの
です！ナザレ^{よげん}のイエス・キリスト^{よげん}は、その時^{とき}戻^{もど}って来^きま^せん^でし^た！更^{さら}に、「一^{ひと}つ^{いし}の石^{ほか}も他^{ほか}
の石^{いし}の上^{うえ}に残^{のこ}されて^いないだ^らう」とい^{よげん}うイエス^{よげん}の預^{よげん}言^ごを文^{ぶん}字^じ通^{つう}り解^{かい}釈^{しゃく}し^たと^しま^す。で^す
が、都^{とし}市^{はかい}が破^か壊^{くわい}され^たに^も関^{かん}わ^らず、何^{なん}千^{ぜん}と^いう石^{いし}が無^む傷^{きず}のま^ま今^{きゆう}日^{げんざい}現^{げん}在^{ざい}ま^で残^{のこ}って^いま^す。

せいしよ ねっしん けんきゅうしゃ ねつれつ しんじやたち よげん にげんせい あき
聖書の熱心な研究者や熱烈な信者達にとって、イエスのオリベットの預言の二元性は明らか
かです。それは、きげん ねん ねん あいだ こうてい ぐん
紀元70年から71年の間に、ローマ皇帝ティトゥスの軍によるエルサレ
ムりやくだつ はかい かたち すで いぜんじつげんの略奪と破壊という形で、既に以前実現しています。ですが、せいしよ おどろ こと
聖書によれば、驚いた事
に、いまげんざい まち しょうらい いちどはかい こと
今現在のエルサレムの町が将来もう一度破壊される事になっています。

ほか にげんせい しめ れい おう しょ しょう せつ げんごはつおん
他にも二元性を示す2つの例が、バビロン王（イザヤ書14章4節）とティレ（原語発音：
くんしゅ しょ しょう せつ きじゅつ なか
タイア）の君主（エゼキエル書28章2節）の記述の中にあります。

せいしよ かいせつしゃ みな じんるい じつざい こうてい としこっか あくま にげんせい
聖書の解説者は皆、これらの人類、実在した皇帝や都市国家、そして、悪魔サタンの二元性
すべから どうい
において 須く同意しています。

おう あくま いっしゅ しょ しょう せつ きじゅつ
バビロン王は悪魔サタンの一種であり、イザヤ書14章12-14節で記述されています。
くんしゅ あくま いっしゅ しょ しょう なかごろ おな しょう せつこうはん
ティレの君主も悪魔サタンの一種で、エゼキエル書12章の中頃から同じ章の17節後半
きじゅつ
にかけて記述されています。

しょうりょうほう つぎ よう だいさん いんゆてき い み こだい おう
この2章両方には次の様な第三の引喩的な意味があります。それは古代バビロン王もティ
レの君主も、やがて来る中央ヨーロッパの軍事独裁者や、だにえる書11章40節の北の
おう など ゆうめい けもの いんゆ てんけい こと もの にせげんしゃ
王、等という有名な「獣」を引喩した典型だったという事です。その者は偽預言者と
きょうりよく さいらいじ ほろ みらい きょうだい せかいてきどくさいしゃ
協力し、キリストの再来時に滅ぼされる、未来の強大な世界的独裁者なのです。（ヨハネ
もくしろく しょう せつ
の黙示録19章20節）

せいしよ にげんせい いんゆ てんけい れい たくさん
聖書には二元性だけでなく、引喩や典型の例が沢山あります。

きゅうやくせいしよ しんやくせいしよ ふる けいやく あたら けいやく さいしよ
かくして、旧約聖書と新約聖書があり、古い契約と新しい契約があり、最初のアダム
にくたい も その す だい こと
（肉体を持ちエデンの園に住むアダム）と「第2のアダム」（イエス・キリストの事。コリ
んとしんと てがみ しょう せつ そんざい あくまの信徒への手紙I、15章45、46節）が存在するのです。ファラオは悪魔サタンの
シンボルであり、モーゼとアロンはヨハネのもくしろく しょう ふたり しょうにん あ黙示録11章の「二人の証人」に当てはまり、
エジプトは「罪」のつみ いちれい じん そんざい かみ たましい ゆる てんけい一例で、イスラエル人の存在は神に魂を許される典型なのです。

だっしゅつ とき こだい ふ えきびょう けもの ちから ふ そそ
エジプト脱出の時に古代エジプトに降りかかった疫病は、獣の力によって降り注がれる
おお さいなん あらわ じん とら み かいほう しょうらい
大いなるトランペットの災難を表し、イスラエル人を囚われの身から解放したのは将来キ

リストの再来の時に神の民を再び集める事を表しています。(イザヤ書10章20、21節、イザヤ書11章11、12節、イザヤ書11章15、16節、イザヤ書19章23、24節、エレミア書50章18、19節、エゼキエル書11章17-20節、ホセア書1章10、11節、ヨエル書2章18-20節、ゼカリア書1章17節、ゼカリア書8章3-8節、等。)

紅海の海を割った道を通してイスラエルの子らが脱出するのは教会の洗礼の象徴であり(コリンと信徒への手紙I, 10章1-4節), 彼らの「罪の荒野」での滞在は、新たに洗礼を受けたキリスト教徒に立ちほだかるものに打ち勝つ為の生活を象徴的に表しています。

ヨルダン川を渡って「約束の国」へ向かうのは、キリスト教徒が神の王国を授かる事の象徴であり、40年の放浪生活は(40という数字は聖書の試練またはテストを表しています)、新たに生まれたキリスト教徒一人一人が直面する試練や苦難の象徴となります(ヨハネの黙示録16章33節)。聖書の中には、神の計画の引喩的な例えである典型が文字通り沢山存在しています。

従って、年に何度かある祝日は、それぞれが神の目的の真実をなぞったものなのです。そういう意味では、祝日は預言的なものと言えます。

(1) 過越し祭(主の晩餐)と子羊の血を流す行いはキリストの犠牲を象徴したものでした。新約聖書では、生贄の子羊に代わって、キリストが種なしパンとひとすりのワイン(キリストの打ち砕かれた体と流された血の象徴)を代用したが、それは同じ事の象徴でした(マタイによる福音書26章26-28節)。キリスト教徒が過越し祭に参加する事は、イエス・キリストの流された血を自分の罪をあがなう個人的な救世主として受け入れる事を象徴しています(コリンと信徒への手紙I, 11章23-30節)。

(2) 種なしパンの日は精進に満ちた人生を送る事を象徴的に表しています。種の入ったパンは、虚栄心、うぬぼれ、ねたみ、食欲といった人間性の卑しい要素で「膨張」している状態の象徴です。種なしパンを7日間食べる事は、(元来エジプトの過越し祭とエジプトと直接関係があったのですが)キリスト教徒がキリストと洗礼を受け入れた後に

おく しょうじん み じんせい しょうちやうてき あらわ しょうと てがみ しょう
送る精進に満ちた人生を象徴的に表しています。(コリント信徒への手紙Ⅰ、5章2
—8節、レビ記23章5、6節)

(3) 五旬節は(使徒行伝2章、レビ記23章9—16節)「初穂」の収穫であって、
かみ いま ぜんせかい すく はつほ しゅ もと よ こと
神は「今」全世界を救おうとしているのではなく、ただ「初穂」を主の元へ呼んでいる事を
しき さいしょ はつほ あと ひ おおが
示唆しています。そして、イエス・キリストこそが「最初」の初穂であり、後の日の大掛かり
にんげん いのち しゅうかく あと お く こと しき
な人間の命の収穫が、その後を追ってやって来る事を示唆しているのです。「ペンテコス
たん ばんめ い み しゅうごと あんそくび にちめ たね ひび
ト」とは単に「50番目」を意味し、週毎の安息日から50日目に、「種なしパンの日々」
あいだ お はつほ しゅうかく めい えいごやく
の間に起こった「初穂の収穫」のギリシャ名の英語訳です。

(4) トランペットの祭り(レビ記23章23節、民数記29章1節)は主に「最後のラ
しゅうちゅう まつ き しょう せつ みるすうき しょう せつ おも さいご
ツパ」に集中した祭り(コリント信徒への手紙Ⅰ、15章52節)、それはイエス・キ
さいらい とき ひび わた もくしろく なか あ かみ さいなん むす
リストの再来の時に響き渡ります。もっとも、それは黙示録の中で明かされた神の災難と結
すべ い み ふく もくしろく しょう
びつた全てのトランペットの意味も含んでおり、(ヨハネの黙示録8章6、7、8、10
せつ ちじょう す ひとびと たい どうらい こと せんげん けいこく
節など)、地上に住む人々に対してキリストがまもなく到来する事の宣言や警告を
しょうちやうてき あらわ よう まつ ちじょう な と
象徴的に表しています。その様なわけで、トランペットの祭りは地上で成し遂げられる
かみ みわざ い み さいてん かみ おうこく ふくいん あかし けいこく い み こ
「神の御業を意味する祭典でもあります。「神の王国」の福音を、証と警告の意味を込め
と さいてん でん しょう せつ
て説く祭典なのです。(マタイ伝24章14節)

(5) 贖罪の日(レビ記23章27—29節)にも元来の儀式では多くの引喩や典型が含ま
しょうざい ひ き しょう せつ がんらい ぎしき おお いんゆ てんけい ふく
まれていました。それは今日も断食の形で続けられています。(使徒行伝27章9節、
こんいち だんじき かたち つづ しとぎやうでん しょう せつ
よはく ひ かみ いったい こと しょうちやう しょうらいぜんせかい さいしゅうてき かみ わかい
余白)その日は神と「一体となる」事を象徴しており、将来全世界が最終的に神と和解
とき か
する時を描いています。

(6) 幕屋の日は古代イスラエルの滞在と、彼らが仮の住家として仮小屋(タバナクル)に住
まくや ひ こだい たいざい かれ かり すみか かりごや す
んだ事実を象徴したものです。現代において、キリスト教徒とは「選ばれた民、王の系統
じじつ しょうちやう げんだい きやうと えら たみ おう けいとう
を引く祭司、聖なる国民、神に属する民・・・異教徒や巡礼者」(ペトロの手紙Ⅰ、2章
ひ さいし せい こくみん かみ ぞく たみ いきやうと じゅんれいしや てがみ しょう
9—17節)も含んだものです。しかしながら、もともと幕屋の日は秋の「収穫を祝う祭
せつ ふく まくや ひ あき しゅうかく いわ まつ
り」で、豊作を祝う日です。それは神の王国がこの世に到来する事を予言し、まもなく地上
ほうさく いわ ひ かみ おうこく よ どうらい こと よげん ちじょう

とうらい かみ おうこく ひょうげん おお よろこ とき いま ひ いわ
に到来する神の王国を表現した大いなる喜びの時でありました。(今でもこの日は祝うべ
きだと解っている人達によって祝われています。)

さいご しんぱん ひ き しょう せつ まくや まつ あと つづ まいとし
(7)最後の審判の日(レビ記23章39節)は幕屋の祭りのすぐ後に続き、毎年ある7
ばんめ かみ しゅくじつ あ くだい しろ ぎょくざ さば もくしろく
番目の神の祝日に当たります。それは「偉大なる白い玉座の裁き」(ヨハネの黙示録20
しょう せつ だい ふっかつ もくしろく しょう せつ ひょうげん さば
章11節)と第2の復活(ヨハネの黙示録20章5節)を表現しています。それは、裁
とき けい せんこく めいかく ねん きかん あいだ しょ
きの時(刑の宣告ではありません!)であり、明確な100年の期間の間(イザヤ書65
しょう せつ おこな い あいだ いちど め こと まこと すく きかい あた
章20節)に行われ、生きている間に一度も召された事や、真の救いの機会を与えられ
ひとたち ため
なかつた人達の為のものです。

よう ねん かい さいじつ しゅくじつ かみ けいかく ひょうげん かんぜん
この様に、年に7回の祭日、または祝日には、まさしく「神の計画」を表現した完全な
てんけい いんゆ みいだ
典型や引喩が見出されているのです。

せいしょ もじどお なんじゅう いんゆてき てんけい うち かずすく れい
聖書には文字通り何十という引喩的な典型があります。その内の数少ない例として、アブ
ラハムがいます。アブラハムがイサクを差し出す様に命じられた時、彼が進んでその命に従
おり か おひつじ さだ みずか さだ
った折、代わりに雄羊が差し出されました。これは、御子イエス・キリストを自ら差し出し
ちち かみ どうえい れい いみ おきて さず てん ちち かみ
た父なる神を投影させた例なのです。モーゼはある意味(掟を授けた点で)父なる神の
とくちょう も かみ ちゅうかいしや かみ こ てんけい い
特徴を持ち、また(神とイスラエルの仲介者として)神の子キリストの典型とも言えます。
とも もくしろく しょう ふたり しょうにん てんけい おうきゅう ふたり
モーゼとアロンは共に黙示録11章の二人の証人の典型です。ファラオの王宮の二人の
まじゅつし わたし たみ い くだ の ふたり しょうにん しょうちょう
魔術師、ヤンネとヤンブレは「私の民を行かせて下さい」と述べている二人の証人の象
てんけい じん ほしゅう かいほう きわだ
徴です。ダビデはイエス・キリストの典型です。ユダヤ人のバビロニア捕囚からの解放に際立
か
って描かれている、エズラ、ネヘミアとゼルバベルはイエス・キリストの象徴なのです。
しょうちょう

してきひょうげん せつめい
詩的表現による説明

せいしょ だいぶぶん し かたち か こと おぼ くだ しへん が か
聖書の大部分が詩の形で書かれている事も覚えておいて下さい。(詩篇や雅歌といった)
してき ひつき たくさん しゅよう よげん おお し か
詩的な筆記が沢山あり、また主要な預言の多くが詩で書かれています。

してき いみ れい ひと みずか みと けが くちびる み きよ しょう
詩的な意味の例の一つとして、イザヤが自ら認めた「汚れた唇」の身を清めるかの様に、
くちびる も すみび こと しょ しょう ほか ゆうめい れい
その唇に燃えた炭火をのせた事があります(イザヤ書6章)。他にも有名な例として、エ
れミア書13章1-10節、25章15節、27章23節とエゼキエル書3章2、3節、
れい しょう しょう せつ しょう せつ しょう せつ しょう しょう せつ

しょう せつ かいほう よろこ うた してきひょうげん れい いく しょ しょう
4章4-6節があります。解放の喜びを歌う詩的表現の例が幾つかイザヤ書35章1-
7節、55章12、13節、そしてヨエル書2章21-30節に見られます。

せいしょ せつ 聖書のシンボル説

せいしょ しそう あらわ ため つか せいれい いく ちから ぶつりてき
聖書はよく思想やアイデアを表す為にシンボルを使います。聖霊は幾つかの力の物理的
ぐげんか かんれんづ れい みず ふくいんしょ しょう せつ
な具現化に関連付けられています。例として水（ヨハネによる福音書3章5節、エフェソの
しんと てがみ しょう せつ てがみ しょう もくしろく しょう
信徒への手紙5章26節、ヨハネの手紙I、5章6節、ヨハネの黙示録22章1、17
せつ ひ しとぎょうでん しょう せつ てがみ しょう せつ もくしろく しょう せつ
節）、火（使徒行伝2章3節、ペトロの手紙I、1章7節、ヨハネの黙示録3章18節、
など）、そして風（ヨハネによる福音書3章3節、使徒行伝2章2節、等）があります。

みず せいめい いのち あた ぶっしつ かぜ いく き せいめい
水は生命になくなくてはならない命を与えてくれる物質であり、風すなわち空気も生命に
ぜったいひつよう じょうか きんぞく ばあい きよ はかい ちから も ひ
絶対必要です。浄化したり（金属などの場合）清めもし、また破壊の力を持つ火。これら
きょうりよく かみ せいれい あらわ つか
は強力な神の聖霊を表すものとしてよく使われています。

さら たいよう ほし ひかり おな よう つか せいしょ げんだいか
更に、太陽や星の「光」も同じ様に使われています。もし聖書が現代書かれたとしたら、
かみ おお ちから いらよく あらわ かく こうせん つか
おそらく神はその大なる力と威力を表すものとして核エネルギーやレーザー光線を使った
でしょう。

いく せいしょ ちゅうもく くだ お ひ しゅ しんでん やま ほか
もう幾つかの聖書のシンボルに注目して下さい、「終わりの日に、主の神殿の山は、他の
やまやま うえ くんりん みね たか くにぐに たいが む
山々の上に君臨し、どの峰よりも高くそびえよう。国々はこぞって大河のようにそこに向か
うだろう。そして、多くの民が来て言うでしょう。「主の山に登り、ヤコブの神の家に
しゅ わたしたち みち しめ わたしたち みち あゆ しゅ ほう で
う。されば、主は私達に道を示され、私達はその道を歩もう」と。主の法はシオンから出
みことば で しゅ くにぐに あらせ さば おお たみ いまし くれ
で、御言葉はエルサレムから出る。主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼ら
けん う なお すき やり う なお かま くに くに む けん あ いくさ
は剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、戦を
し ことはもう無いだろう。」（イザヤ書2章2-4節）

ほか おお よげんどうよう やま かみ とうち しょうちょう こと あき
他の多くの預言同様に、ここにおける山とは「神の統治」の象徴である事は明らかです。
さいご おおじしん じじつふた さ こと さん ちじょう しれいとう かみ
最後の大地震で事実二つに裂ける事になっているオリブ山に、地上での司令塔である神の
しんでん た い せいしょ よげん もじどお いみ しょうちょうてき いみ ふく
神殿が建つであろうと言う聖書の予言には、おそらく文字通りの意味と象徴的な意味が含
まれています。（ゼカリヤ書14章4-9節）

しゅ いえ やまやま うえ くんりん た せいしょ きじゅつ すべ
主の家は「山々の上に君臨し」建てられるだろうという聖書の記述は、いわゆる全ての
きょうだい ちから たいこく りょうが こと い み みね たか すべ
強大な力や大国を凌駕する事を意味し、「どの峰よりも高くそびえよう」というのは全て
しょうこく うえ た こと い み
の小国の上に立つ事を意味します！

ほし てんし しょうちょう つか もくしろく しょう せつ み
星は天使の象徴として使われています。（ヨハネの黙示録9章1節）ヨハネが見たイエ
げんえい もくしろく しょう かた みぎて ほし
ス・キリストの幻影には（ヨハネの黙示録1章）「その方の右手には7つの星・・・」があ
もくしろく しょう せつ せいしょ かんてん み せいしょ
ったとあります。（ヨハネの黙示録1章16節）ここに聖書そのものの観点から見た聖書
かいしゃく しかた れい たんじゅん み すべ きじゅつ よ すす
の解釈の仕方の例があります。単純にヨハネが見たもの全ての記述を読み進んでいくと、
つぎ だい せつ とうたつ わたし みぎ て み なな ほし なな きん しょうだい
次の第20節に到達します。「あなたが私の右の手に見た七つの星と、七つの金の燭台の
ひみつ なな ほし きょうかい てんしたち もくしろく しょう せつ
秘密だが、七つの星は教会の天使達であり、・・・」（ヨハネの黙示録1章20節）

かがや あ みょうじょう い もくしろく しょう
イエス・キリストは「輝く明けの明星」と言われています。（ヨハネの黙示録22章1
せつ もくしろく しょう せつ
6節、ヨハネの黙示録2章28節）

けもの きょうぼう う い もの いきょうと せいふ おうこく さ
「獣」または凶暴で飢えた生き物といったものは、よく異教徒の政府または王国を指して
つか たと しょう しょう びき おお けもの か きじゅつ
使われます。例えばダニエル書の7章では4匹の大きな獣が描かれています。その記述に
ちゅうもく くだ だいいち しし しょう わし つばさ は し み
注目して下さい。「第一のものは獅子の像であったが、鷲の翼が生えていた。見ていると、
つばさ ひ ぬ じめん お にんげん しょう あし た にんげん ころも あた
翼は引き抜かれ、地面から起こされて人間の様にその足で立ち、人間の心が与えられた。

（これはネブカドネザルの狂乱と回復をさしています。）第二の獣は熊の像で、横ざまに
ね さんぼん ろっこつ ぐち む た おお にく く
寝て、三本の肋骨を口にくわえていた。これに向かって、『立て、多くの肉を食らえ』とい
こえ つぎ み べつ けもの ひょう しょう せ とり つばさ よつ
う声がした。次に見えたのはまた別の獣で、豹の像であった。背には鳥の翼が四つあり、
あたま よつ けんりよく けもの あた よる まぼろし さら つづ み
頭も四つあって、権力がこの獣に与えられた。この夜の幻で更に続けて見たものは、
だいやん けもの おそ ひじょう つよ きょだい てつ は も く
第四の獣で、それはおぞましく、恐ろしく、非常に強く、巨大な鉄の歯を持ち、食らい、
か くだ ざんがい あし ふ ほか けもの こと じゅつぽん つの
噛み砕き、残骸を足で踏みにじった。他の獣と異なって、これには十本の角があった。
つの こうさつ いっぽん ちい つの さき つの さんぼん ため
その角を考察していると、もう一本の小さな角が生えてきて、先の角のうち三本はその為
ひ ぬ ちい つの にんげん しょう め ぐち さんだい こと
に引き抜かれてしまった。この小さな角には人間の様に目があり、また、口もあって尊大な事
かた み ぎよくざ す ひ お もの ぎ
を語っていた。なお見ていると、王座が据えられ、『日の老いたる者』がそこに座した。そ
ころも ゆき しょう しろ はくはつ きよ ひつじ け しょう ぎよくざ かえん しょう
の衣は雪の様に白く、その白髪は清らかな羊の毛の像であった。その王座は火炎の像であ
り、その車輪は燃える火の如く」（ダニエル書7章4-9節）

さて、こうした様々な獣の意味を明らかにする際の、聖書独特の解釈の仕方に注目して
くだ おな しょう よ つづ だい せつ どうたつ よんとう おお けもの
下さい。同じ章を読み続けていると、第17節に到達します。「これら四頭の大きいなる獣
は、地より出で立つ四人の王である。」王が王国を表している事はダニエル書の第2章を
よ
読めばはっきりします。ここでネブカドネザル王の見たものであり、ダニエル書2章32-
35節で述べられている大きいなる肖像が見えてきます。

ダニエルは奇跡を通して夢の解釈を与えられ、それをネブカドネザルに明かします。彼は言
おう なか おう てん かみ くに けんりよく つよ えいこう さず
いました。「ああ、王の中の王よ。天の神はあなたに国と、権力と、強さと、栄光を授けら
れしました。そして、いたる所の人間も野の獣も空の鳥も、皆あなたの手に下り、あなたを
かれ しはいしゃ おうごん とうちしゃ あと おと
彼らの支配者としました。あなたは黄金の統治者なのです。あなたの後に、あなたに劣った
ほか くに おこ だいさん せいどう くに ぜんち しはい こと だいよん
他の国が興り、さらに、第三の青銅の国が全地を支配する事となるでしょう。また、第四の
くに すべ う くだ てつ よう つよ ほかい てつ よう
国は全てを打ち砕く鉄の様に強いことでしょう。そして、あらゆるものを破壊する鉄の様に、
くに すべ こなごな ほかい み いちぶ とうど いちぶ てつ あし
この国は全てを粉々に破壊します。あなたも見た、一部が陶土で一部が鉄でできている足と
ゆび よう おうこく ぶんれつ てつ やわ とうど ま ごらん
その指の様に、その王国は分裂することでしょう。鉄が柔らかい陶土と混じっているのを御覧に
よう くに てつ つよ そな あし ゆび いちぶ てつ いちぶ とうど
なった様に、この国には鉄の強さも備わっています。足の指は一部が鉄、一部が陶土です。
ですから、この国には強い部分もあれば、脆い部分もあるのです。また、鉄が柔らかい陶土
ま あ ごらん よう ひとひと こんいん ま あ
と混じり合っているのを御覧になった様に、人々は婚姻によって混じり合います。しかし、
てつ とうど と あ こと よう ひと こと おうたち じだい てん かみ
鉄が陶土と溶け合う事がない様に、一つになる事はありません。この王達の時代に、天の神
ひと くに おこ くに えいえん ほろ こと しゅけん ほか たみ て わた こと
は一つの国を興されます。この国は永遠に滅びる事なく、その主権は他の民の手に渡る事
なく、全ての国を打ち滅ぼし、永遠に続くことでしょう。」(ダニエル書2章37-44節)

これほど明白なものがあるのでしょうか？ 大きいなる肖像の頭はネブカドネザル王を表し、
おう おうこく かんぜん たが お か おな こと い み
王と王国は完全に互いに置き換わるもので、同じ事を意味します。

せいしょ か あと おと ほか くに おこ だいさん
聖書はこう書いています。「あなたの後に、あなたに劣った他の国が興り、さらに、第三の
せいどう くに しょう せつ せいしょ けんきゅうか れきしか
青銅の国が・・・」(ダニエル書2章39節) 聖書の研究者や歴史家はバビロニア、メドペ
ルシャ、ギリシャ・マケドニアそしてローマ帝国という世界を支配した四大異教国家が明らか
ていこく せかい しはい よんだいいきょうこっか あき
に続いた事実を一般的に受け入れています。

この明白な預言で多くの人々が見落としてきたのは、ダニエル書第2章の大いなる肖像と、第7章の4番目に登場する獣がキリストの再来で終わりを迎えるという事実です。したがって、4番目の獣、すなわち歴史を通して何度も回復と復活を繰り返すローマ帝国は、キリストが再来する直前の時まで在存する事になっているのです！

イエス・キリストが復活するのは「この王達の時代」（ダニエル書2章44節）なのです！
この場合、「この王達」はダニエル書2章の大いなる肖像の十本の足指の事です。

聖書の証言に注目して下さい。「また、あなたが見た十本の角は、まだ王国を授けられていない十人の王である。だが、彼らは一時の間、獣と共に王として権力を授けられるだろう。この者達は、心を一つにしており、自分達の権力と強さを獣に委ねるだろう。彼らは子羊と戦うが、子羊は主の中の主であり、王の中の王なので、彼らに打ち勝つでしょう。そして、子羊と共にある者達は、召され、選定され、誠実であるだろう。」(ヨハネの黙示録17章12-14節)

キリストの再来までに、中央ヨーロッパにおいて、十の国が強力な独裁制度の元に統一され、おそらく「ヨーロッパ合衆国」と呼ばれるようになる事に疑いの余地は在りません。

獣の「角」は国家の国民的または宗教的な指導者達の象徴です。ダニエル書7章の「小さな角」は中世に様々な政府を打ち倒した教皇を指している事は明らかです。

イスラエルの形状は（イスラエルの家やユダの家を含めて）常に女性として描かれています。実際、全能なる神はイスラエルを花嫁として、神を旧約聖書を申し出る求婚者として描いています。神はイスラエルに掟を授け、イスラエルの守護者、平定者そして供給者になると約束する事で「プロポーズ」したのです。イスラエルが神の掟の契約条件を受け入れた時、両者の間に「契約」すなわち同意が成立しました。

神は「婚約」という比喻を使って、「私は彼らの夫であった」と言いました。（エレミア書31章31-32節）

イスラエルが契約の条件を破った時、神はその行為を姦淫または売春と呼びました。エゼキエル書16章全体を読んで下さい。そこで神はイスラエルを、捨て子であったのを神が見つけた、若くて美しい女性として描き、「野の若草の様に増えさせた」（エゼキエル書16章7節）が、イスラエルは神を見捨てて「その美貌を頼みとし、姦淫を行いました。」（エゼキエル書16章15節）エゼキエル書23章もまた重要な章で、その中でイスラエルの家（北の十氏族）は「アホラ」と呼ばれ、ユダの家を象徴するエルサレムは「アホリバ」と呼ばれています。

この章はさらに、神との契約を破り異教徒の民と交じり合う彼らの姦淫を描いています。

教会は「身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶった」女性として描写されています。（この場合、ヨハネの黙示録12章1節の12人の使徒達を象徴的に表しています）旧約聖書の中のいくつかの預言を読む際、「シオンの娘」とか「シオンの娘達」と呼ばれる女性の記述は必ずしも教会を意味しないという事に注意しなくてはなりません。

イザヤ書3章1節に1つの例があります、「主は言われる、シオンの娘らは高慢で、首を伸ばして歩く。流し目を使い、気取って小股で歩き・・・」。この言葉は明らかに国としてのイスラエルの女性達を指しています。神はまた大きな過ちである普遍的な教会を語るのに、売春婦または墮落した女を象徴的に使っています！次の言葉に注目して下さい、「沈黙に座し、闇に入れ、カルデアの娘よ。諸国の女王と呼ばれる事は二度とない。私は自分の民に対して怒り、私の遺産を汚し、お前の手に渡した。お前は彼らに憐れみをかけず、老人にも枷を負わせ、甚だしく重くした。私は永遠に女王だ、とお前は言い何事にも心を留めず、その結末を考えなかった。

しかして今これを聞くがよい。快樂に浸り、安樂に暮らす女よ。心の中で、私は他に並ぶ者など居ない唯一の者であり、やもめになる事なく、子を失う事もない、と言う者よ。しかし、その両方が、一日のうちに、瞬く間にお前に起こり、子を失いやもめとなるだろう。どれほどの魔術や呪文を唱えても無駄だ。お前は平然と悪事をし、『見ている者はいない』と言っていた。お前の知恵と知識がお前を墮落させ、お前は心の内で言っていた。私は他

なら もの い ゆいつ もの しよ しょう せつ もくしろく
に並ぶ者など居ない唯一の者である、と。(イザヤ書 47 章 5-10 節) ヨハネの黙示録 1
しよ せつ さんしよ くだ
7 章 5 節も参照して下さい。

じかん なが りかい 時間の流れの理解

かみ せいしよ じかん なが りかい ため とくべつ かぎ あた
神は聖書の時間の流れを理解する為に、ある特別な鍵を与えてくれます。

つぎ ことば ちゅうもく くだ まえたち こども あ の よんじゅうねん あいだひつじか
次の言葉に注目して下さい。「お前達の子供は、荒れ野で四十年の間羊飼いとなり、お
まえたち さいご ひとり の したい まえたち はいしん つみ お とち ていさつ
前達の最後の一人が荒れ野で死体となるまで、お前達の背信の罪を負う。あの土地を偵察し
よんじゅうにち につさう おう いちにちごと いちねん か よんじゅうねんかん まえたち つみ お
た四十日という日数に応じて、一日毎に一年を課した四十年間、お前達は罪を負わねば
ならない。・・・」(民数記 14 章 33-34 節)

かみ たみ せんけんたい やくそく とち さが につさう かれ はんとう
神ははっきりとイスラエルの民の先遣隊が約束の土地を探した日数は、彼らがシナイ半島の
こうや さまよ ねんすう あらわ わたしたち おし
荒野で彷徨った年数を表すと私達に教えてくれています。

しよ しょう ちゅうもく くだ いえ いた
それでは、エゼキエル書の 4 章に注目して下さい。エゼキエルは「イスラエルの家に至る
あんないばん まち ちず か い かれ すなば あそ
案内板」としてタイルにエルサレムの町の地図を描くように言われます。彼は、砂場で遊ぶ
こども よう じょうへき まち か どうじ ほういようへいき すべ ととの まち しんぐん
子供の様に、城壁をめぐらせた町を描き、当時の包囲用兵器を全て整えて町に進軍する
ぐんたい か つみ お ねんすう か ため さいしよ いっぽう わき うえ
軍隊を描き、それからイスラエルが罪を負う年数を描く為に、最初は一方の脇の上に、それ
はんたいがわ よこ
から反対側に横になりました。

わたし まえ さんびやくきゅうじゅうにち かれ つみ ねんすう おう につさう まえ
「私はお前に、三百九十日という、彼らの罪の年数に応じた日数を、お前がイスラエル
いえ つみ お あた きかん お つぎ みぎわき した よこ
の家の罪を負うものとして与える。その期間が終わったら、次に右脇を下にして横たわり、
いえ つみ よんじゅうにちかんお わたし まえ いちにちごと いちねん か
ユダの家の罪を四十日間負わねばならない。私はお前に一日毎に一年を課すとする。(エ
ぜキエル書 4 章 4-6 節)

せいしよ よげん りかい うえ じゅうよう かぎ じっさい おうよう れい たし
この、聖書の預言を理解する上で重要な鍵を、実際に応用した例を確かめるには、ヨハネ
もくしろく しょう しょう さんしよ くだ じよせい じよせい かみ まこと きょうかい
の黙示録 12 章と 13 章を参照して下さい。ここで、女性(この女性は神の真の教会
あらわ なら おお わし つばさ さず かみ ほご しょうちよう しゅつ
を表すと習いましたね)が「大きな鷲の翼」を授けられ(神の保護の象徴 - 出エジプト
き しょう せつ こうや じぶん ばしょ と い へび のが ひととき ふたとき ほんとき
記 19 章 4 節)、荒野の自分の場所へ飛んで行き、蛇から逃れて一時、二時、また半時の
あいだ もくしろく しょう せつ
間やしなわれる。(ヨハネの黙示録 12 章 14 節)

あと しょう にせ よげんしゃ けもの はくがい きかん よんじゅうにかげつ こと よ と
後に13章で、偽の預言者と獣によって迫害された期間は「四十二ヶ月」である事が読み取
れます。(ヨハネの黙示録13章5節)

しかし、ヨハネの黙示録12章6節では、同じ期間が千二百六十日と呼ばれています。1
日に実際1年を表すという鍵を用いて単純に計算すれば、神の真の教会がひどい迫害
を経験した中世は、実は千二百六十年間であった事が分かり、更に預言に出てくる1年
は1ヶ月を三十日とした三百六十日である事がわかります！

この様なわけで、預言の目的で書かれた聖書の「時間」の意味が分かってきます。

ひとき せいしょ よげん ねん ひとき ふたとき はんとき ちょうど
一時は聖書の預言では1年にあたります。だから、「一時、二時、それから半時」は丁度3
ねんはん い み ねんはん ひとつき にち かげつ な た よう
年半を意味します。3年半は一月30日とした42ヶ月で成り立っています。この様にして、
せんにひやくろくじゅうにち よんじゅうに かげつ さんねんはん ひょうげん
千二百六十日、四十二ヶ月、また三年半という表現があるのです。

あき おお かんなん てん しるし しゅ ひ ねんはん あ
明らかに、大いなる艱難、天の徴や主の日は、この3年半に当てはまります。

ちゅうい せいしょ よげん なか にちじ き なん ぐたいき かぎ
注意：聖書の預言の中で「日時を決め」ようとしてはいけません。何らかの具体的な鍵、すな
わち数字を載せた表とかギリシャ語、ヘブライ語、英語などで書かれた数値を解き明かした
すうじ の しょう ご かいご か すうち と あ
と思い、ある大掛かりな預言が成就される特定の日を算出したと考えるのは大きな誤ち
おも おおが よげん じょうじゅ とくてい ひ さんしゅつ かんが おお あやま
であり、多くの人達が落胆と共にこれを学びました。
おお ひとたち らくたん とも まな

せいしょ よげん ぜんけい 聖書の預言の全景

さん よげん げんだい い わたしたち もっと たいせつ
オリベット山でのイエス・キリストの預言は現代に生きる私達にとって最も大切なもので
す！これらの預言こそが、ヨハネの黙示録に載っている出来事の順序を解き明かしているの
よげん もくしろく の できごと じゅんじょ と あ
です。詳しく言えば、6章と7章の初めから、黙示録の終わりに掛けて発展する艱難の
くわ い しょう しょう はじ もくしろく お か はってん かんなん
いっばんてき てん しるし しゅ ひ こと ふくいんしょ しょう
一般的なテーマや天の徴、そして主の日の事です。(マタイによる福音書24章、マルコ
ふくいんしょ しょう ふくいんしょ しょう
による福音書13章、ルカによる福音書21章)

じゅうよう できごと じゅんじょ りかい ため ひと しゅう かぎ ちゅうもく くだ
これらの重要な出来事の順序を理解する為の、もう一つの主要な鍵に注目して下さい。

しょ しょう せつ ふくいんしょ しょう せつ ちゅういぶか よ くら
ヨエル書2章31節を、マタイによる福音書24章29節と注意深く読み比べ、それから、
もくしろく だい しょう しょう よ くだ
ヨハネによる黙示録の第6章と7章をお読み下さい。

この様に少し調べただけで、大きな艱難（マタイによる福音書24章21、22節）またはヤコブの苦難の時は、天の徴の「前」に起こる事が分かるでしょう。天の徴は艱難の「後」からやってくる事が分かります。主の日は天の徴の「後」からやって来るのです！

この様に単純な理解を介するだけで、「大いなる艱難」に先立って地上から教会が取り去れると主張する「携拳（ラブチャー）」を説く人達は完全に誤っている事が分かります。

携拳を説く人は、一般に艱難と主の日を同一視して混同しています。

今まで学んだ事の助けになるように自分で簡単な勉強をされる事をお勧めしますが、それにはマタイによる福音書の前半で、イエス・キリストがこの地上に起こす大きな出来事について短く記述されている所をお読み下さい。

それと共に、ヨハネの黙示録6章と7章もお読み下さい。キリストが最初に預言したのは「偽のキリストと偽の預言者」が現れるだろうという事に注目して下さい。さて、「黙示録の四騎士」（ヨハネの黙示録6章）のうち最初の者は、キリストの様に見えるが、「鋭い諸刃の剣」ではなく弓を持っています。彼は勝利に勝利を重ねる為に出て行きます。多くの人達がこの預言について混乱しています。それはキリストを意味するのでしょうか？ イエス・キリストご自身にその解釈をしてもらいましょう！「いかなる預言も個人的な解釈の対象ではない」という事を覚えておいて下さい。

黙示録の四騎士の二人目は、戦争を意味する赤い馬に乗っている事に注目して下さい。大いなる事象のうち2番目の事象はどうなると、イエスは言いましたか？「戦が起こり戦の噂が広まるだろう！」です。

一度事象の順序をはっきりさせると、ヨハネの黙示録6章の「四騎士」それぞれの意味が分かってきます。（1）偽のキリストと偽の預言者、（2）戦と戦の噂、（3）飢饉、（4）死と破壊。

第5の封印は艱難の象徴であり、第6の封印は天の徴、第7の封印は七つのトランペットの災いです。

じゅうよんまんよんせんにん かぞ き だいぐんしゅう もくしろく しょう ものたち おお かんなん
十四万四千人と「数え切れない大群衆」(ヨハネの黙示録7章)の者達は、大いなる艱難
さいちゅう あと ひたい かみ こくいん お こと ちゅうもく くだ
の最中、またはその後でしか額に神の刻印は押されないに事に注目して下さい。(ヨハ
ねの黙示録7章14節)したがって、彼らはその期間はまだ地上にいるのです。

はかせ しゅつばん なか もくしろく
ブリンガー博士は、コンパニオン・バイブル(Zondervan出版)の中で、ヨハネの黙示録6
しょう しょう ふくいんしょ しょう ひかく おもしろ ずひょう ふろく おき
章、7章とマタイによる福音書24章を比較する面白い図表を付録に収めています。

べんきょう いちれい もくしろく しょう ちゅういぶか よ くだ なな ゆうめい おか まち
勉強の一例として、ヨハネの黙示録17章を注意深くお読み下さい。七つの有名な丘の町
きょうかい じぶん たず くだ きょうかい いくど な ふっかつ
にどの教会があるのか自分に尋ねてみて下さい。どの教会が、幾度と無く復活してきた
しんせい ていこく ふく おお きょうだい いきょうと くにぐに しいはい きょうかい
「神聖ローマ帝国」を含んだ、多くの強大な異教徒の国々を支配してきましたか? どの教会
せいじゃ ち よ
が「聖者の血に」酔ってしまいましたか?

きょうだい にせ きょうかい こうたん とき たたか じゅう おうこく けつそく じっさいて か こと
この強大な偽の教会はキリスト降誕の時に戦う、十の王国の結末に実際手を貸す事に
ちゅうもく くだ ちじょう おうたち うえ くんりん きょうだい とし あ きょうかい
注目して下さい。地上の王達の上に君臨する強大な都市に在るのは、どの教会ですか?

かんが くだ
考えてみて下さい。

しん もくしろく しょう せいしょ しょう ちゅういぶか
信じられないかもしれませんが、ヨハネの黙示録17章という聖書のほんの1章を注意深
しら せいしょ よげん かん ほん ちよしゃ ふく おお ひと
く調べるだけで、あなたは聖書の預言に関する本の著者を含めた、多くの人よりずっとまし
りかい こと で き
な理解をする事が出来ます。

もちろん わたし しょうさつし かんけつ ふ ないよう すうさつ おお しょもつ たやす かくだい う
勿論、私がこの小冊子で簡潔に触れてきた内容は、数冊の大きな書物にも容易く拡大し得
るものです!ここではそうする時間も余地ありません。この小冊子で学んだ事を案内役と
じかん よち しょうさつし まな こと あんないやく
して利用する事で、あなたは聖書の預言の大部分をより良く把握し理解する事がきっと出来る
りよう こと せいしょ よげん だいぶぶん よ はあく りかい こと で き
でしょう。

おわり
— 終 —

しりょう ないよう かい ちよしゃ しゅつばんしゃ めいかく うえ ゆうじん
この資料は、内容を改ざんせず、著者と出版社を明確にした上でなら、コピーして友人や
かぞく むりょう はいふ こと で き いっばんたいしゅうむ しゅつばん こと で き
家族に無料で配布する事が出来ます。一般大衆向けに出版する事は出来ません。

この出版物は個人的な探求の道具として利用されるよう意図したものです。どんな内容でも人の言葉をそのまま受け入れるのは賢明ではないという事を理解し、全ての事柄に関して、あなたはご自分で聖書に基づいて証を立てるようにして下さい。

ガーナーテッドアームストロング福音協会

私書箱 747 Flint、テキサス 75762

電話番号：(903) 561-7070 Fax: (903) 561-4141

なお当福音協会のウェブサイトでは多くの文献が無料で入手できます。

www.garnertedarmstrong.org/

ガーナーテッドアームストロング福音協会の活動は、キリスト教徒とイエス・キリストの教えに従って福音を説く、協力者からの自発的な十分の一税、奉納及び献金で成り立っています。